富豪刑事
関節話法

THE COLLECTION OF YASUTAKA TSUTSUI
江苏工业学院图书馆
藏书章

筒井康隆全集 10

富豪刑事
関節話法

新潮社

富豪刑事・関節話法

筒井康隆全集　第20巻

昭和五十九年十一月二十日　印刷
昭和五十九年十一月二十五日　発行

定価一五〇〇円

著者　筒井康隆

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六-五一一一
編集部　東京（〇三）二六六-五四一一
振替　東京四-八〇八番

印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-644420-8 C0393

筒井康隆全集第二十巻・目次

短篇連作

富豪刑事……7

短篇

関節話法……141
中隊長……174
われらの地図……155
日本地球ことば教える学部……183
顔面崩壊……162
最悪の接触（ファースト・コンタクト）……192
また何かそして別の聴くもの……170

エッセイ

こんなふうに外国テレビ映画を見ている……211
苦労なし……218
『決戦・日本シリーズ』解説……212
困った電話……220
歌謡曲の奇怪なイメージ……217
星新一語録……221

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

前代未聞へタクソ大マンガ……223
星新一の残酷性と人間愛……225
オーディオを語る……230
山手裏手通りにて……231
笑う……232
『発狂した宇宙』解説……233
筒井康隆に25の質問……235
『善意株式会社』解説……238
福島正実氏とぼく……241
教育目的の美名の下に改竄は許されるか？……242
『タイムマシンのつくり方』解説……244
須磨寺駅周辺……258
真実の文学……260
SFでしか表現できない思想……260
青春時代の読書……262
私の處女作——文部大臣のお話……263
SFブーム……264
筒井康隆聖会長御託宣……265
『空飛ぶ冷し中華Part2』まえがきにかえて……266
『神聖代』解説……267
作家が書評する時……271
まわり道……274

断片（フラグメント）を活性化させる麻薬……275
大乱歩ふたたび……279
霊感のつかみ方……282
SFは定着するか……284
神戸からの手紙……286
虚構におけるハナモゲラの自己完結性……288
江川に関する初夢……292
MUSIC AT AN EXHIBITION……295
虚構性の再発見……295
遅すぎてSFの指針となり得ぬSF評論の翻訳……300
芝居の楽しみ……303
虚構と現実……304
解説　中田耕治……346

富豪刑事・関節話法

裝幀　山藤章二

短篇連作

富豪刑事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

富豪刑事の囮（おとり）

「さて諸君。五億円強奪事件は、強盗罪の時効七年めまでにあと三カ月だ」

でっぷりと肥った特別捜査本部のキャップ福山警視が、メンバーである二十人の刑事を、アルフレッド・ヒッチコックそっくりの顔になかばあきらめの表情を浮べて見まわした。「投入した捜査員延べ約二十万人、身辺を洗った容疑者約十五万人、作成した捜査資料が資料室のひと部屋にぎっしり」

「それでも、容疑者を四人にまで絞ることができたのですから、これまでの捜査がぜんぜん無駄だったわけではありません」事件発生当時からの捜査員だった狐塚刑事は、つい最近退職した前任キャップのあとを引きついでこの署へやってきたばかりの福山に、挑むような眼を向けた。

「いや。何も無駄とはいっとらんが」

あわてて弁解しようとする福山を無視し、狐塚は尖（とが）った歯を見せて全員を睨（にら）みまわした。「最も強い手がかりとなったあの特殊な塗料は、専門店からたった五十六人にしか売られていないことがわかった。この五十六人のうち、あの薄いウンコ色の分を買ったやつは」

「ベージュ色でしょう」横から、前歯が欠落してアルフレッド・E・ニューマンみたいな顔になった布引刑事が口をはさんだ。

「ベージュ色の罐（かん）を買ったやつは十八人。この十八人のうち、三人は女性だった。残りは十五人。この十五人のうち」

「二人は老人です」と、布引がいった。

「二人は六十歳以上の老人。残りは十三人。この十三人のうち、オートバイに乗れないやつが三人。残りは十人だ」

「待てまて。その三人を容疑圏内から除外して、本当にいいのか」福山キャップがあわてて訊（き）ねた。「オートバイを持っておらず、無免許であるにしても、ひとりどこかでこっそり練習して、ということだってある」

狐塚は大っぴらに今さら何をという表情で宙を睨み、福山に向きなおった。「そういう可能性のある者はむろんこの三人の中には含めていません。この三人のうち、二人は小学生。そしてもうひとりは」

「片足です」と、布引が口を出した。

「オートバイに乗るのに不自由な人だ」と、狐塚が言いなおした。「これで残りは十人。そのうちの三人には、確実な現場不在証明がある」

福山キャップは、今度はやや遠慮勝ちに訊ねた。「その三人のアリバイが崩れる可能性は絶対にないのかい」
「ひとりは買った塗料で大学の校舎の壁に資本主義がどうのこうのと書いたため、事件当時は警察にいました。もうひとりは事件の数日前に病死。つまり事件当日は天国にいたことになります」狐塚は真面目な顔で、馬鹿ていねいにそう答えた。「最後のひとりは県警本部の会議に出席中でした。つまりわれわれの署長なんです。当人は庭の兎小屋を塗装するために塗料を買ったと主張しておりますが、このひとのアリバイをもう一度確かめてみますか」
福山は咳ばらいをした。「いや。それには及ばんだろう」
「残りは七人」と、狐塚が大声でいった。「うち三人は、買った塗料を使っていないことがはっきりしている。むろん、本人たちにはわからないように調べて確かめたのだ。中のひとりは塗料屋で塗料を買った直後、店の前でころんで罐の蓋をとばし、道路に塗料をぶちまけた。大騒ぎになったので、このことは商店街の多くのひとから確認できた。あとのふたりは庭と物置に罐を放置している」
「残りは四人」掛けあいのように布引が横から叫んだ。
「マザー・グースに、テン・リトル・インディアンという歌があったな」くすくす笑いながら猿渡刑事が、隣りの大助にそうささやいた。
「何がおかしい。私語はつつしんでくれ」狐塚が猿渡を睨みつけてから、大助が口にくわえている葉巻を見咎め、唇の片端を吊りあげて犬歯を見せた。「神戸君。この部屋で葉巻はやめてくれ」
「あ。これは失礼」大助はいそいで、まだ一、二センチしか灰になっていない葉巻の火をもみ消し、もみ消す時にぽっきりと中ほどからふたつに折れた葉巻を惜しげもなくアルミの灰皿に捨てた。
「でも狐塚さんだって、さっき煙草を喫っていたじゃないですか」にやにや笑いながら、猿渡がいった。
「紙巻きならいい。しかし葉巻はいかん」狐塚が目を三角にした。「わざわざハバナから取り寄せた一本につき八千五百円の葉巻を横でぷかぷかやられて、仕事の話なんかできるものか」
「そいつは一種の差別だなあ」猿渡が、あいかわらず薄笑いを浮べながら大助を弁護した。「だって神戸君は、葉巻しか喫わないんだから」
猿渡を睨みつけている狐塚の横から、布引が、これも挑戦的ににやにや笑いながらいった。「おいおい。刑事ともあろうものが、あまり大っぴらに大富豪の味方をするなよ」
「ははあ。君がそうかね。あの大富豪の神戸喜久右衛門氏の息子さんというのは」福山キャップが小さな眼をまん丸にして大助の方へ身をのり出した。「署長から、話だけは

聞いとったが」
「話を続けます」狐塚が、怒鳴るような声を出した。「残りは四人だ」
「四人です。四人」布引が、わざわざ四本指をかざし、全員にうなずきかけた。
「この四人はいずれも事件当日のアリバイがなく、オートバイを持っていて、年齢は二十歳台後半で、モンタージュ写真に、まあ、似ているといえば似ていて、例の塗料を買っている。もっとも、その塗料をすでに使っているかどうかはまだわからない。四人にはそれぞれ尾行がついているが、絶対に当人たちには悟られないようにしている。したがって聞き込みも大っぴらにはやっていず、無論まだ家宅捜査もやっていない」
「しかし、あと三カ月しかないんだよ、君」福山キャップが、ややおどおどした口調で狐塚にいった。「時効にならんうちに、早いとこその四人を参考人として調べはじめた方がよくはないのかね。そして家宅捜査を」
「われわれは」狐塚が声を低くした。「犯人が家の中に金を隠していなかった場合のことを考えております。いったん参考人として調べられたら、それ以後はもう常に尾行がついているものと彼らは思うことでしょう。しぜん、今まで以上に、金を隠してある場所へは足を向けようとしなくなります。彼らを警戒させるような調べかたは、もっとさし迫ってからでもいいと思いますが」
「三カ月という時間が、さし迫っているかいないかは考えかた次第だな」
渋い顔でそう呟いた福山に向きなおり、狐塚は軽く一礼した。「もちろんキャップがすぐ彼らを参考人として呼ぶようにご命令なさるのでしたら、わたしとしては何もこの意見を押し通すつもりはないのでありまして」
狐塚や福山からいちばん離れた席にいる猿渡が、癇高い声でいった。「容疑者として調べられていることに気づいた場合、犯人が、金の隠し場所を変えようとするなど、自ら墓穴を掘るような行動をとることも考えられますが」
狐塚は肩をそびやかして猿渡に軽蔑の眼を向けた。「そりゃ、たしかにそういう犯人もいる。しかしこの事件の場合、ああいう犯罪を考えついたほどの頭のいいやつが、そんな馬鹿な行動をとると思うかね」
「ではこのまま、時効ぎりぎりになるまで、彼らの尾行を続けるというのかね」福山キャップは、どうやらそれがいらいらした時の癖らしく、デスクの上に指で無限大の記号を描きながらいった。「ほかになんの手も打たず、ただ尾行だけを続けるというのかね」
狐塚はやや吃り気味に答えた。「それはまあ、尾行と平行して、彼らに悟られぬ程度に身辺を洗うとか、そういったことはやるべきでありましょうが、基本的にはその」

「あのう」大助が、いちばんドアに近い席でおずおずと片手をあげた。「ひとつ、提案があります」
不機嫌な表情のままで福山はうなずいた。「言ってみたまえ」
「犯人が金を使いはじめれば、隠し場所もわかる筈です。ですから、その四人に金を使わせてみればいいと思います」
福山はまた眼を丸くした。「どうやって」
「わたしが、刑事という身分を隠して彼らと接触します。そして彼らが大金を使わざるを得なくなるような工作をします」大助はのんびりした口調でいった。「これならまあ、尾行と平行してでもやれると思いますが」
「どんな工作をするっていうんだ」狐塚が汚ないものを見る眼で大助を見ながら訊ねた。
「はあ」大助は色白の顔を少し赤くした。「そこまではまだ考えていません。相手次第で臨機応変に」
「そんな出たらめな」布引が大っぴらに苦笑した。「こういう事件ではね、神戸君、きちんとした捜査方針に加えて、明確な計算が必要なんだよ。勘に頼った行きあたりばったりでは、この犯人は罠にかかっちゃくれないよ」
「いや。なかなかいい方法だと思うな」猿渡が大助に味方しはじめた。「それに、ほかの者ならともかく、神戸君にならその役はうってつけじゃないか」
「どうしてかね」
さっきから興味深げに眼を輝かしはじめていた福山キャップに向きなおり、猿渡は答えた。「ひとに金を使わせようとするためには、先にこっちが金を使って見せる必要もありますからね。それとなく相手に金を使わせるよう仕向けるには、その方法が一番でしょう。神戸君ならこのメンバーの中でもいちばん若いから、四人とはすぐ親しくなれる筈だし、四人の中の誰かが犯人であった場合、その犯人は、ただ神戸君とつきあっているだけで金を使いたくなる筈です。神戸君がそれを意識していずとも、ただ神戸君の金の使いかたを見ているだけでね」
「君もそうなのかね」あまりにも大っぴらに大助の提案を支持する猿渡へやや警戒の眼を向け、福山がいった。
猿渡はためらわずに答えた。「ぼくには金がありませんからね。はじめからあきらめていますのでそんな気にはなりません。しかし犯人は違います。犯人は、とにかく五億という現金を持っているのですから」
「容疑者と友達になったりして、もし犯人に刑事という身分がばれたらどうする」狐塚が顔をしかめたままでいった。「そんなことになったら取り返しがつかんぞ」
ここぞとばかり、猿渡は大笑いをして見せた。「ばれる筈がないでしょう。キャデラックを乗りまわし、葉巻を半分も喫わずに捨て、十万円以上のライターをいつも置き忘

れ、イギリスで誂えた仕立ておろしの背広を着たまま雨の中を平気で歩くような刑事がどこにいますか。神戸君がぼろを出すとすれば、それは大富豪としてのぼろを出すわけで、ぼろを出せば出すほど刑事らしくなくなるのです」

「君はいつも、そんなことをするのか」福山キャップはあきれ顔で大助を眺めた。「十万円以上のライターをばらまいたり」

「ばらまくなんて、とんでもない。いつもそんなことばかりしているわけではありません」大助は猿渡をちょっと睨んでから、福山に紅潮した顔を向け、不服そうにそういった。それから、やや苛立たしげに眉間へ皺を寄せた。「いかがですか、キャップ。ぜひぼくに、容疑者四人との接触をお許し下さい。これは、やってみる価値があると思うのです。うまくいかなかった場合でも、あとの捜査に迷惑をかけるようなへまはやりません。むろん最後まで、刑事という身分は絶対に明かしませんし、あらゆる手段を使ってでも身分がばれないようにするつもりです。なんならぼくの、刑事という職を離れた、私生活における個人的な接触であるということにしていただいてもいいのです」

「まあ、たてまえなどはどうでもよろしい」福山が、大きくうなずいた。「よし。許可しよう。君の私有財産を捜査に使うという点が少し気になるが、私的に関係者と知りあって金を使ってしまうケースだってなくはない。ま、その金のことは一件落着後に捜査費用として請求するかどうかを考えたらいいだろう」

「それは、キャップおひとりの判断で許可なさるわけですね」自分に相談がないのを不満に思う表情をありありと見せ、狐塚がいった。

「そうだ」福山が狐塚を睨み返した。「君たちの誰の意見も聞かず、わたしが許可したのだ」彼は大助に向きなおり、うなずきかけた。「やってよろしい。ただし、ひとこと注意しておく。容疑者は犯人ではなく、犯人に類似したものですらない。どんな人間だって、容疑者である間はすべてまっとうな社会人として扱わねばならん。また、四人とも犯人でない場合も考えられる。くれぐれも彼らには、いかなる意味の迷惑もかけないように。いいね」

「それは大丈夫です」大助は大きくうなずいた。

つりこまれるように一緒にうなずいて、猿渡が口を出した。「むしろその四人は、たいへんいい目を見ることになるでしょうな」

「余計なことは言わんでよろしい」福山がぴしりと、猿渡にいった。「さてと。それじゃその四人の尾行をしたひとに、それぞれ報告して貰おうかな」全員を見まわした。

痩せて眼鏡をかけた、刑事というよりはむしろ学者タイプの鶴岡がゆっくりと身をのり出し、ポケットから手帳をとり出した。「それではまず、わたしから」じろりと大助

を見て、彼は咳ばらいをした。「わたしが尾行を担当した男というのは、幡野哲也という三十歳の男です。事件発生当時の年齢は、したがって二十三歳。職業はカメラ屋の店員で、母親とふたり、自宅に住んでおります。自宅は父親の代からの一戸建て住宅ですが、実はこの男、自宅に実験室というか工作室というか、まあ、そういった部屋を持っておる。つまり発明狂なんですな。いろんなメカニズムが好きで、オートバイを持っているのもその為でしょう。頭はたいへんよく、事実、アイディア・コンテストなどには何度も入選しております。正直に申しますと、わたしはこの男が犯人に違いないと思うておる。というのはこの幡野は、カメラ屋の定休日が毎週火曜日なので、火曜日になるといつも自分の発明した品物とか設計図とかを持って特許事務所へ特許申請の手続きをしてもらいに行きます。で、彼と昔からの顔なじみであるこの事務所の男の話では、幡野はいつも、研究するための金がない、金がないとこぼしているそうです。大学時代、この幡野はたいへんな秀才だったそうで、ああいう犯罪は、この男ぐらい頭がよくなくては計画できんとわたしは思うし、金がないと嘆いているのも、強奪した金を大っぴらに使えぬもどかしさで嘆いているのだとわたしは解釈する。その証拠に、時効が迫った今、彼はたいへん浮き浮きしております。他にもいろいろとおかしなふしがありますが、それはまあ、なかばはわたしの勘ですから、あとでゆっくり神戸君に教えてやることにしましょう」

ぱたり、と手帳を閉じて鶴岡が椅子の凭れに背をあずけると、今度は布引が喋りはじめた。

「わたしが尾行した男も、おおいにあやしいのです。わたしはこの、須田順という二十八歳の男こそ真犯人だと思う。なぜ思うか。この須田は家がたいへん貧乏で、したがって自分も貧乏。アパートでひとり暮しをしております。金持というものを極端に憎んでいて、自分の勤めている建設会社の社長や重役の悪口ばかり言っております。もちろん、そういった悪口を同僚には言えませんので、ではどこで言うかというと、家のすぐ近くの、行きつけの屋台のおでん屋の親爺にいう。この親爺も金持が嫌いなので、話があうわけですな。趣味といえばオートバイですが、これは主として通勤用に使用しているだけです。会社の帰りにその屋台の前にオートバイを停めて一杯飲みながら親爺と喋るという、これもまあ趣味といえば趣味といえるでしょう。一流の大学をいい成績で卒業しているのに、会社ではなんとなく皆から敬遠されていて、不満がつもりつもっているという感じですが、それが爆発しないのは、五億円という現金を握っているからではないかと」

福山キャップが手をあげて制した。「まあ、君の推測はあとで神戸君にゆっくり話してやってくれ。次は誰かね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com